

平成 20 年度大学院教育改革支援プログラム  
「東アジア高度人材養成共同化プログラム」採択プロジェクト

中国における持続可能な発展と日本の環境協力  
北京研修報告書  
(松岡研修室)

報 告 書

担当教授：松岡 俊二

早稲田大学大学院アジア太平洋研究科

2009 年 3 月

「大学院教育改革支援プログラム（大学院 GP）」  
「中国における持続可能な発展と日本の環境協力」  
北京研修報告書について

本報告書は、文部科学省・大学院教育改革支援プログラム（大学院 GP）に基づき、2009年2月19日（木）から2月24日（火）（5泊6日）に実施した「中国における持続可能な発展と日本の環境協力」をテーマとする北京研修の報告書である。研修には大学院生11名と教員1名（松岡）が参加した。

本研修は、海外の有力大学との合同ゼミナールなどを行うことにより、本学大学院生のプレゼンテーション能力や討論能力の向上を図り、議論に強い国際競争力のある大学院生の育成を目的として実施したものである。本研修は、早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・松岡研究室が中心となり、「中国における持続可能な発展と日本の環境協力」を統一テーマとして掲げ、北京市を対象に選定し、北京大学、北京師範大学、清華大学などの環境問題に関連する教授・大学院生との合同ゼミを企画するとともに、本テーマに関連する環境 NGO や国際援助機関などの関連機関・組織のインタビュー調査や関連施設の視察も実施した。

本研修の企画においては、松岡研究室の Alice さん（D1）と池田さん（M1）がロジ、サブの両面において中心的に働き、中国・北京からの留学生・夏さん（M1）が協力した。それぞれの学生の努力・貢献に感謝します。また、北京大学の Zhang 教授、北京師範大学の Tao 教授、清華大学の張教授、常教授、温教授など北京の先生方にも感謝いたします。

日本と中国は長い歴史的交流の中で発展してきたが、19世紀後半から20世紀前半は極めて不幸な歴史を経てきた。西欧列強の植民地化の圧力への抵抗と近代化への努力の中で、日中は戦争や紛争を繰り返し、日本は傀儡国家・満州国を創設するなど中国に対して多大な被害を与えると同時に、日本自らも広島・長崎への原爆投下や沖縄戦などを経て、第二次大戦に敗北した。19世紀後半から20世紀前半の約50年間の日中関係は、お互いの信頼を大きく傷つけるものであった。

戦後、中国が中華人民共和国となり新たな国づくりを始め、日本は戦後復興から高度経済成長を経て新たな経済大国となった。1972年9月29日には日中国交回復が行われ、中国は1979年以降の改革開放のもとで急激な発展を遂げてきた。日本は国交回復後、特に中国の改革開放政策を支援するため総額3兆円を超える円借款や技術協力・無償資金協力を行ってきた。日本の中国へのこうした ODA（政府開発援助）供与は、中国の急速な経済成長につれ、1990年代以降、インフラ分野から次第に環境分野が大きな比重を占めるようになってきた。日中環境協力は1990年代後半から2000年代の前半におけるもっとも重要な援

助イシューであった。

こうした日中環境協力は、中国における上下水道整備、森林保全、大気汚染・水質汚濁対策、日中友好環境保全センター、環境モデル都市事業（大連、重慶、貴陽）など様々な領域や形態で実施されてきたが、中国の汚染問題や自然環境問題は依然として深刻な状況にある。

一方、2008年の北京オリンピック開催を契機に、日本は中国への新たな円借款供与を終了し、今後の日中環境協力は技術協力（ODA）だけでなく NGO や企業など様々な民間アクター間の国際協力が重要となるなど、新たな展開が模索される転換点にあると言える。

他方、中国自身も新興援助国としてアジアやアフリカへの開発援助を積極的に展開するようになった。さらに地球温暖化による被害が目に見える形になりつつある中で、中国自身の気候政策の確立と国際的コミットメントが重要となってきた。

今後の日中環境協力は、単に日本と中国という2国間の環境問題だけでなく、日中が協力してアジアの環境、さらには世界の環境を守り、グローバル・サステナビリティの実現のために日中が共に努力・協力・連携していくことが必要となっている。

今回の北京研修はこうした課題へアプローチするため、「中国における持続可能な発展と日本の環境協力」という統一テーマを掲げ、北京大学、精華大学、北京師範大学の大学院生と合同ゼミを行い、本研究科の院生たちも大いに刺激を受けたものとする。参加した学生が今回の研修を契機に、一層自らの勉学・研究に励み、将来、地球環境の保全とグローバル・サステナビリティ実現のため、世界の各分野で活躍することを願うものです。

最後に本プログラムの運営にあたられた山岡教授、川村教授、小林教授、村嶋教授および運営スタッフの山本さん、鄭さんに感謝の意を表します。

2009年4月16日

早稲田大学  
大学院アジア太平洋研究科  
教授 松岡 俊二

# 目次

1. プロジェクト日程表 . . . . . P1
2. 参加者氏名・学年 . . . . . P2
3. 研修報告書 . . . . . P3～P45

## 1. プロジェクト日程表

プロジェクト日程：2009年2月19日（木）～24日（火）

日程表：

2009年2月19日（木）	北京到着
2月20日（金）	北京師範大学との共同セミナー （9：30－14：25） 環境と開発機構訪問 （15：30－16：30）
2月21日（土）	北京水道博物館見学 （10：00－11：45） 北京大学との共同セミナー （14：00－16：30）
2月23日（月）	自然の友訪問 （10：30－11：45） JICA 中国駐在事務所訪問 （13：30－15：10） 精華大学張先生のプレゼンテーション を拝聴 （16：00－17：00）
2月24日（火）	帰国

## 2. 学生参加者氏名・学年

	氏名	学年
1	池田れい	M1
2	夏揚	M1
3	Ziyi Quin	M1
4	管淑敏	M1
5	Halldor Elis Olafsson	M1
6	Kanok Phuaknuem	M1
7	Warren David Pohl	M1
8	張麗	M2
9	Ragnheidur Reynisdottir	M2
10	Han Joo Lee	M2
11	Alice Park Lee	D1

引率：松岡俊二教授

2009年4月8日

早稲田大学アジア太平洋研究科

松岡研究室

池田れい

## 中国における持続可能な発展と日本の環境協力

### 北京研修報告書

#### 1. 研修期間

2009年2月19日（木）～2月24日（火）

#### 2. 目的

近年世界では環境破壊が大きな問題となっている。中でも中国を代表とする東アジア地域ではその急激な経済発展に伴い、大気汚染・水質汚濁など様々な環境問題が生じている。環境問題には一国の限定された地域におけるものから地球規模のものまで様々であり、各国、また各地域の国々が協力して対策を行ってはいるが、汚染が広がっている現状を考慮すると対策はまだ十分とは言えない。私達は中国における様々な環境問題の現状・対策や課題と日中間の二国間環境協力の現状などについてより深く理解することを目的とし、北京の環境 NGO や JICA を訪問した。また北京大学・北京師範大学との共同セミナーを開き現地学生とのディスカッションを通して様々な意見を交換した。これらのセミナーは現地学生との交流・違う立場からの意見を聞き今後の研究に役立てることは勿論のこと、事前準備において早稲田生の研究・プレゼン能力を高めることをも目的とした。またこれらのセミナーは学生主導のものであった為、様々な国籍の学生が協力して1つのことを作り上げるという機会にもなった。

これら様々な目的や機会を達成するため、大学院 GP プログラムに基き北京に5泊6日の日程で滞在しフィールドリサーチを行った。

### 3. 現地スケジュール

北京到着	2月19日(木)
北京師範大学との共同セミナー (9:30-14:25) 環境と開発機構訪問 (15:30-16:30)	2月20日(金)
北京水道博物館見学 (10:00-11:45) 北京大学との共同セミナー (14:00-16:30)	2月21日(土)
自然の友訪問 (10:30-11:45) JICA 中国駐在事務所訪問 (13:30-15:10) 精華大学張先生のプレゼンテーションを 拝聴 (16:00-17:00)	2月23日(月)
帰国	2月24日(火)

訪問した各組織の住所・担当者名

- 1) Professor Tao Zhuan Jin, Beijing Normal University

北京师范大学

Address : Beijing, ShinJieKouWaiDaJie, 19 Hao

北京市新街口外大街 19 号

- 2) Mr. Chen Ji Liang/IED Officer; <http://www.ied.org.cn/>

Address: Hong Tai Property, #19 Min Wang Yuan, Dong Cheng District Beijing

环境与发展研究所

北京市东城区民旺园 19 号院鸿泰商务楼 (010)5131-9200 (010)6427-5604

- 3) Professor Zhang Shiqiu; Peking University; Director of Institute of Environment and Economy (IoEE)  
Address: Beijing, HaiDingQu, YiHeYuanLu 5  
北京大学  
北京市海淀区颐和园路 5 号
- 4) Mr. Zhuang Boju/FON Researcher; <http://www.fon.org.cn/channal.php?cid=74>  
Adress:Room 368, Wanbo BLD, Adress:Ganyu Hutong 53,Dongcheng District, Beijing 100006  
TEL: 86-10-6523 2040ext804 M: 86-138 1001 4466  
北京市东城区甘雨胡同 53 号 万博写字楼 368 室
- 5) Ms. Uemura; JICA PekingOffice  
<http://www.jica.go.jp/china/english/office.html>  
Adress:Beijing,ChaoYangQU,DongSanHuanBeiLu5Hao,BeijingFazhanDaSha 400 Hao  
北京市 朝陽区 東三環北路 5 号 北京發展大廈 4 0 0 号  
TEL:86-10-6590-9250

#### 4. 参加者

修士 1 年 7 名、修士 2 年 3 名、博士 1 年 1 名の学生 1 1 名+引率 松岡俊二教授の計 1 2 名

	学生参加者氏名	学年	係
1	池田れい	M1	プロジェクトリーダー
2	夏揚	M1	現地宿泊等手配
3	Ziyi Qin	M1	通訳
4	管淑敏	M1	お土産等手配
5	Halldor Elis Olafsson	M1	北京大学での MC
6	Kanok Phuaknuem	M1	北京師範大学での MC

7	Warren David Pohl	M1	航空券手配
8	張麗	M2	プレゼンテーション
9	Ragnheidur Reynisdottir	M2	プレゼンテーション
10	Han Joo Lee	M2	プレゼンテーション
11	Alice Park Lee	D1	プレゼンテーション

## 5. 北京師範大学での共同セミナー

タイムテーブル:

開始時刻	終了時刻	事柄
9 : 30	9 : 40	MC によるオープニング
9 : 40	9 : 50	TAO Chuan Jin 教授・松岡俊二両教授によるはじめの言葉
9 : 50	10 : 05	General Budget Support and the Paris Declaration -REYNISDOTTIR Ragnheidur(Waseda)-
10 : 05	10 : 20	Assistant material for presentation: A try to resolve ecological crisis -SUN Xiaopeng(BNU)-
10 : 20	10 : 30	休憩
10 : 30	10 : 45	Evaluation of China and Japan's Environmental Cooperation -IKEDA Rei(Waseda)-
10 : 45	11 : 10	各教授によるコメント
11 : 10	11 : 30	学生によるディスカッション
11 : 30	13 : 30	昼休憩
13 : 30	13 : 45	Introduction of my work experience in ENGO and the research plans in the future -Christiana.Lawson(BNU)-
13 : 45	14 : 00	Governance Structure for Addressing Chinese Environment Problems with a Focus on the Role of NGO -LEE Han Joo (waseda)-
14 : 00	14 : 15	教授によるコメント
14 : 15	14 : 30	学生によるディスカッション
14 : 30	14 : 45	MC と各教授による終わりの言葉

北京師範大学では北京師範大学・早稲田大学の両学生、環境 NGO 職員計約 25 名が参加した。セミナーは学生主導の形で行われ、各々両大学より司会を 1 名ずつ出した。早稲田大学の司会は Kanok Phuaknuem。プレゼンテーションのテーマは下記の通りで、計 5 名によ

る各 15 分間のプレゼンテーションが行われた。

1:General Budget Support and the Paris Declaration

-REYNISDOTTIR Ragnheidur(Waseda)-

2: Assistant material for presentation: A try to resolve ecological crisis

-SUN Xiaopeng(BNU)-

3: Evaluation of China and Japan's Environmental Cooperation

-IKEDA Rei(Waseda)-

4: Introduction of my work experience in ENGO and the research plans in the future

-Christiana.Lawson(BNU)-

5: Governance Structure for Addressing Chinese Environment Problems with a Focus  
on the Role of NGO

-LEE Han Joo (waseda)-

内容は以下の通り。

1. ベトナムとタンザニアの General Budget Support について
2. エコグッズの概念とエコマーケットの重要性・将来への展望などについて、
3. 日中間の環境協力プロジェクトの評価と新規の円借款採用がなくなった今後の環境協力の形について
4. 環境 NGO での仕事の経験の紹介、ENGO についての議論
5. 中国での社会能力開発アプローチにおける課題について

プレゼンテーションの合間の昼休みには学内を見学するなど学生同士の交流もあり、和やかな一時を過ごした。プレゼンテーション後の参加者によるディスカッションでは、日本企業の海外進出による環境汚染についての考え方や、環境 NGO である「自然の友」職員が持続的な発展な立場からの考え方、また社会公益研究の立場からの考えなど意見を交換した。

## 6. 環境 NGO (環境と開発機構、自然の友) 訪問

中国の環境 NGO 団体「環境と開発機構」・「自然の友」を訪れ、その活動や中国における NGO の役割や立場などの話を伺った。中国における環境 NGO は 1994 年に初めて設立されその活動の歴史は 15 年と浅い。しかし特に北京においては 2008 年に北京オリンピックが開催された際に国と環境 NGO が協力したことで市民の環境意識は高まり、環境 NGO はこの環境意識の改善について貢献したと言えよう。このことから分かるように環境 NGO の役割は徐々に大きくなってきており、今後の益々の活動が期待される。現在の主な

活動は環境教育・環境を考慮したモデル学校の設立・貧困削減など様々な草の根運動を行っている。日本との環境協力については、日本の NGO と中国の NGO の協力がまだ薄いので、今後関係強化が望まれるとの意見もあった。

## 7.北京市水道博物館見学

北京市水道博物館は2000年に設立された。この博物館は、1908年に作られた北京初の水道場の旧跡を利用して建設されている。博物館内は3つの部分に分かれており、創業当時部分・建国後の部分・現代の部分と100年の歴史を追って北京の上水道事業の発展の様子を見学することが出来た。以前は手作業での労働により管理がされていたが、最近ではコンピューターや音、光、電気などの技術を駆使し科学技術によるものを中心として管理が成されている。この博物館の見学を通し、水道から出てきた水はただ出来たものではなく、貴重な水資源であると共に人々の労働から作り上げたものであるということがよく分かった。

## 8.北京大学での共同セミナー

タイムテーブル:

開始時刻	終了時刻	事柄
14:00	14:10	MCによるオープニング
14:10	14:20	ZHANG Shing 教授・松岡俊二教授によるはじめの言葉
14:20	14:35	Evaluation of Global Warming Policy -ZHANG Li(Waseda)-
14:35	14:50	Cost-Effectiveness Analysis of Near Ground Ozone Pollution Control in Beijing and Surrounding Areas-XIE XuXuan(Peking)-
14:50	15:05	教授によるコメント
15:05	15:20	学生によるディスカッション
15:20	15:35	Implementation of International Environmental Convention -Northwest Pacific Action Plan -LEE Alice Park(Waseda)-
15:35	15:50	Economic analysis of Mercury Control for power plants in China -(Peking)-
15:50	16:05	教授によるコメント
16:05	16:20	学生によるディスカッション

16 : 20	16 : 30	MC・各教授による終わりの言葉
---------	---------	-----------------

北京大学では両学生約20名が参加しプレゼンテーションが行われた。学生主導の形で行われ、両大学より各1名ずつMCを出した。早稲田側のMCはHalldor Elis Olafsson。プレゼンテーションのテーマは下記の通りで、計4名による各15分間のプレゼンテーションが行われた。

- 1.Evaluation of Global Warming Policy -ZHANG Li(Waseda)-
- 2.Cost-Effectiveness Analysis of Near Ground Ozone Pollution Control in Beijing and Surrounding Areas -XIE XuXuan(Peking)-
- 3.Implementation of International Environmental Convention –Northwest Pacific Action Plan -LEE Alice Park(Waseda)-
- 4.Economic analysis of Mercury Control for power plants in China - WU Dan-(Peking)-

内容は以下の通り。

- 1.DAC5 基準に基いた日本の地球温暖化の政策評価
- 2.コストベネフィットで分析された北京地域におけるオゾン汚染規制の評価
- 3.国際環境会議がどの様に実行・履行されているかをケーススタディーでみる
- 4.中国の発電所における水銀コントロールの一番効率的な方法の模索

プレゼンテーションの後には北京大学側が夕食会を開いてくれ、学内のレストランで食事を楽しんだ。



北京大学の ZHANG Shing 教授・学生達と：北京大学にて（2009年2月21日）

## 8. JICA 中国駐在事務所訪問

JICA とは the Japan International Cooperation Agency(独立行政法人国際協力機構)の略であり、日本の公的援助を行っている機関である。中国との関係としては1963年(旧JBIC)よりインフラ整備・人材育成・環境対策など様々な事業を通して現在に至るまで中国へ支援を行っている。中国の環境問題としては、例えば黄砂や砂漠化、水質汚濁などが挙げられるが、これらの環境問題の現状とそれらの問題に JICA がどのような形で関わってきたかなどを JICA 中華人民共和国事務所の職員である大久保晶光さんなどより伺った。今まで中国に対する環境協力は ODA ローンを中心に資金援助の形で行われてきたが、2007年以降の新規 ODA ローンの中止に伴い今後は人材派遣などの技術協力を強化していくこと、また内陸地へのより一層の環境支援が必要であることなどが分かった。

## 9. 清華大学

環境科学と工程系で Miao Chang 教授と Kunmin Zhang 教授と挨拶をし、Zhang 教授による

「Low-carbon Economy & Energy Efficiency」というテーマでのプレゼンテーションを拝聴した。内容は中国における環境技術開発の現状についてであり、中国は京都議定書での二酸化炭素削減義務はないが、低炭素社会に向けての技術開発の推進・環境モデル都市を作るなど努力を行っているということが分かった。京都議定書での二酸化炭素削減義務のない中国の、二酸化炭素削減へ向けた国際社会における役割についての質問などが出された。



**Kunmin Zhang 教授のプレゼンテーションの様子：清華大学にて（2009年2月23日）**

## 10. 今後の予定

未定であるが、これを機会に定期的に共同セミナーなどを開催することになれば今後の交流にも繋がるのではないだろうか。

## 11. 収集資料

- ・張 坤民, 潘 家华, 崔 大鵬 編、(2008)「低炭素経済論 『INTRODUCTION TO LOW CARBON ECONOMY』」、中国環境科学出版社

- [日]吉田文和著  
温宗国訳、张 坤民校正、(2008)、 「日本の循環経済」 The Cyclical Economy of Japan、  
2008年10月、中国環境科学出版社
- 自然之友編 楊 東平/主編、(2008)、「中国環境の危機と転機 (2008)」 「CRISIS AND  
TURNING OF CHINA'S ENVIRONMENT (2008)」、2008年3月、社会科学文献出版社  
social sciences academic press (China)
- 張 坤民 著、(2004)「中国可持續發展的政策与行動 GUANYU ZHONGGUO KECHIXU  
FAZHAN DE ZHENGCE YU XINGDONG」、中国環境科学出版社 (北京)
- 環境保護部自然生態保護司 編、(2008)、「生態省建設理論と実践 SHENGTAISHENG  
JIANSHE LILUN YU SHIJIAN」、中国環境科学出版社 (北京)
- 環境緑皮書 2006年転型与博弈  
HUANJING LU PI SHU 2006 NIAN ZHONGGUO HUANJING DE ZHUANXING YU BOYI
- 独立行政法人日本国際協力機構 (JICA) 原著: 日本技術協力調整専門家 岡国定 改定:  
中国技術協力アドバイザー専門家 難波 緑、(2007)、「日本の技術協力をという利用す  
るか—JICA ルート技術協力活用の手引き」
- 環境与友展研究所編、(2005)「未来可能源可再生源」、知識出版社



北京市水道博物館にて（2009年2月21日）

## 北京研修報告書

学籍番号 4008R302-4

早稲田大学アジア太平洋研究科

松岡ゼミ 池田れい

今回大学院 GP プロジェクトの企画で、松岡ゼミ所属の学生とした中心とした11名の学生が、2009年2月19日から24日の5泊6日の日程で北京にて研修を行った。

研修では現地の大学で共同セミナーを行ったり環境NGOやJICAなどの機関を見学するなど、1週間弱の日程の中で多くの場所訪れた忙しい研修であった。具体的な訪問先は以下のとおりである。

大学：北京師範大学 合同セミナー  
北京大學 合同セミナー  
精華大学 張先生による発表

NGO：環境と開発機構、自然の友訪問

機関：JICA 訪問

施設：北京水道博物館見学

まず、大学でのジョイントセミナーだが、北京師範大学では「General Budget Support and the Paris Declaration」、「Assistant material for presentation: A try to resolve ecological crisis」、「Evaluation of China and Japan's Environmental Cooperation」などのタイトルでの計6本のプレゼンテーションが行われた。午前から午後にかけての長いセミナーであったが、両大学の学生が司会・資料作り・会場準備など様々な係を担い、手作りで仕上げた温かい雰囲気のものが出来上がった。北京大學でも同様に、「地球温暖化政策の評価—DAC5項目を用いて」などのテーマで計4本のプレゼンテーションが行われた。多様な国籍の学生がこれらのセミナーを通して様々な意見や質問を出し合ったことは、大変貴重な経験であったように感じている。私自身のプレゼンテーションは、実のところあまり満足のいかない結果ではあったが、今後の研究の反省材料としていきたいと考えている。

精華大学では張先生の低炭素社会に関するプレゼンテーションを拝聴し、中国の現在の政策や課題について触れた。

次にNGO訪問であるが、今回は2つの環境NGO「環境と開発機構」と「自然の友」を訪問した。中国では環境NGOの活動は1994年に初めて始まったば

かりでまだその歴史は浅いといえると思うが、植林や循環エネルギーを使用した学校の建設、また環境教育の促進といった活動を地道に行っている。北京市では 2008 年にオリンピックがあったことも影響してか、環境に配慮する活動が活発に行われていることが先方の資料などで分かった。「自然の友」の方がおっしゃるには、日本の NGO と中国の NGO の協力がまだ少ないので今後連携を深めていきたいとのことで、今後日本の環境 NGO について調べたり訪問する際には連携が少ない理由や今後の動向などについても見ていきたいと考えている。

日本の支援機構である JICA の訪問では、JICA 職員の方たちから生の声を聞くことができた。中国経済的に十分に発展しているという理由から円借款での新規支援が 2007 年で終了したが、今後の支援についての方針や中国政府と協力していく上でのお互いの努力といったお話を伺うことが出来た。私は JICA に就職を希望しているので、憧れの職場を見学し、その仕事の中身にまで触れることが出来て大変感動した。

最後に水道博物館での見学だが、北京の水道事業は約 100 年の歴史がある。これらの歴史を順に追っていきながら、今に至るまでの水道事業の展開について学んだ。

1 週間弱の短い研修旅行ではあったが私はそのプロジェクトリーダーを務めさせて頂いた。この研修を通して、実際の現地での研修は勿論のこと、事前のプレゼンテーションの準備や航空券などの事務手続き、訪問先のリストアップなど様々なことを学生が協力・相談・連携をして行った。様々な国籍の学生が参加し初めはどうなることかと心配もしたが、無事に終わった今では大変貴重な経験をさせて頂いたと心より感じている。大半の参加者が最終日に次回の研修プロジェクトについて話していたところを見ると、今回の北京研修は中身のあるものとなったのではないかと考えている。松岡教授を始めとして、訪問先の機関や大学の方々、そして細かい事務手続きなどを助けて頂いた大学院 GP の事務所の方々にも大変感謝しており、この場をお借りしてお礼を申し上げたいと思う。本当に有難う御座いました。

2009年2月25日  
アジア太平洋研究科 松岡ゼミ  
夏 揚

## 松岡ゼミ海外研修の報告

### ——北京

今回は2月19日から24日までに、北京で研修してきた。わずか六日間でしたが、とてもいい勉強になったことを感じた。北京師範大学、北京大学の先生と学生たちと一緒に、日中環境や世界環境問題について交流を行った。水道博物館、NGO、JICAへの訪問は、たくさん教室では習えないものを分かるようになった。

北京師範大学での交流は、早稲田松岡ゼミと師範大学の学生25人、教授2人とENGO事務室2人が参加した。早稲田大学の三人と師範大学の二人の学生が発表した。「総予算支持とバリ宣言」、「生態危機を解決するため」、「日中環境協力における評価」、「ENGOで働いた経験とこれからの研究計画」、「中国の環境問題を解決する中でNGOの役目」と言ったテーマであった。ディスカッションではNGOの人が参加しているため、NGOの問題については正確な答えが得るようになった。

北京大学では、学生22人と教授2人参加した。北京大学と早稲田大学それぞれ二人発表した。「国際環境管理西北太平洋行動計画の実施」「北京及び周辺地域のオゾン汚染のコントロールにおけるコストと効果の分析」「世界温暖化政策における評価」「中国発電場の水銀におけるコントロールの経済的分析」でした。それからは、学生たちがディスカッションして、とてもいい交流ができた。

水道博物館は1908年に建築された、北京初の水道場の旧跡を利用して造られたものである。ここでは、100年間を渡った建物と北京の水道の歴史が残されている。展覧館は三つの部分に分かれています。初めは、創業の部分、建国後の部分、現代の部分。実物、絵や写真、地形の模型と説明の文字からは、北京の100年の歴史を持っている水道事業が展示されていた。私たちは、実物によって水道の発展の歴史を知るようになると同時に、この100年間、科学技術によってどんな大きな変化をもたらしたかも分かる

ようになった。他には、音、光、電などの技術を使って、水の生産過程、地下水管のネットワーク、水質の監視測定方法も分かるようになった。

私たちが訪ねたのは「自然の友」と言ったNGOである。中国初の民間保全団体として、1994年に成立した。活動分野は環境公共政策の提唱すること、公衆の環境行為の改善を推し進めること、草の根保全力への協力と支持することである。今の重点は、環境教育と草の根の活動である。環境教育では、公衆と学生にわかれている。公衆には、植林、石炭責任、自転車を提唱すること。学生には、“Bill tree”と言った活動で、学生たちが自然と直接接することによって、自然を大事にする気持ちを養成すること。

JICAでは、ODAローンと技術の援助について紹介してもらった。日本が中国への援助の90%を占めているのはODAローンである。これらの資金は、北京80年代の地下鉄1号線、90年の汚水処理場、今の環境改善と人材養成に使われている。今は、ほとんど中国環境方面に使われている。それからは、中国環境問題について紹介し、その重要性を強調した。北の干旱、石炭の使用によるCO<sub>2</sub>の排出、大気環境が良くない、これらは中国に対して最も深刻な問題である。次は、技術の援助についての紹介である。形としては、資金ではなく、人材を主に行われている。日本の専門家が中国に来て教えるか、中国の人材を日本で習わせるかの二つの方法がある。環境被害賠償制度、温暖化対策、気象観測などたくさんの分野に触れている。

今回の研修は、北京生まれの私にとって、普段見た北京ではなく、その裏にあるものを知るようになった。それだけではなく、問題を解決する中で、次の疑問が出てきている。こういう過程が研究を推し進める力だと思う。これからの研究にとっては、とても役に立つことである。

Ziyi Qin (Chinshii)

Prof. Matsuoka seminar

## Fighting with climate change-----The role of China

### Report of Beijing joint seminar

I am so pleasure that I can have this chance to go to Beijing having joint seminar with the students there. Thanks to the Professor Matsuoka, I learned many things from this Beijing trip.

During these 4 days, we visited 3 universities and had joint seminar with the students there. At Beijing Normal University we discussed about the aid issues and also the NGOs' role in China. What's more, in is the first time I heard of the concept of ecological products market. It is a new idea when we think about the environment protection. At Beijing University we discussed about the policy issues. At Qinghua University we heard the lecture from Prof. Zhang. He talked about the low-carbon society perspective of China. This presentation introduced the past policy and activities and also the future's proposal and technology development direction.

Although we have different focal point at each seminar, we all touched the climate change issues. This issue is a heat issue all over the world. Developed countries have already begun to find a international cooperation strategy to fight with climate change. Since the Kyoto Protocol, there have been so many discussions about the Kyoto protocol .One of these is the responsibility of developing countries, especially China and India.

As we known, China and India are two countries which contribute to a big portion of world's CO<sub>2</sub> emission. However, these two countries now are not involved in any international convention professing to reduce the CO<sub>2</sub> emission. This causes fierce debate between developing countries and developed countries. Many people think that China should do something to reduce the CO<sub>2</sub> emission for the whole world.

Not only among the experts, during this Beijing trip, this topic is also very heat in our discussion. From the discussion we can find the common consensus and also the different opinions on this issue.

Professor Zhang of Beijing University said: China has known her responsibility and already started to take action for preventing climate change. Chinese government has made effort and already done a lot. However, it does' t mean that developing countries can act the same as developed countries. Besides, the developed countries should help developing countries instead of leaving them alone to achieve the emission reduction target.

Professor Zhang of Qinghua University said that: China should do something, and now we are really trying to make improvement. But, China is still a developing country. Many provinces especially the western part of China are still facing the poverty issues. It is difficult for China to set a cap or to make a promise to reduce CO<sub>2</sub> emission to a certain number like developed countries. Many people now in the rural area are still living without electricity. Therefore, China can't join such protocol like Kyoto protocol at present. What's more, the indicator is another important point. We normally use the total emission amount to consider this problem. But it is not proper to use the total amount to define China's responsibility. We should see the per capita index rather than the total number.

I think the developing countries absolutely should do something for the earth. The main problem is "what is the degree?". It is clear that China now still can not set the same cap as the developing countries. But China has already started to take he action like making policy to regulate the emission or encourage the R&D to promote the change of the energy structure. On another hand, not only the government but also the citizens joined such movement. NGOs in China may be not so mature as other countries, but they are growing up and tend to play a very important role. I believe that we have a hopeful future.

Fighting with Climate Change is a task which all the human-being are facing. All the countries should work together. In my opinion, there is no

“free rider”, because all the human will suffer from the climate change. If some countries fight seriously but others do nothing, there will be no achievement. The problem is just that the country which made an effort to prevent this problem have no return at all.

2009年2月28日  
早稲田大学アジア太平洋研究科  
松岡ゼミ  
管淑敏

#### 北京スタディシップ

目的：中国の持続可能な開発問題を研究する  
日中環境協力を勉強する

日程：09.2.19（木）北京に到着  
09.2.20（金）北京師範大学でジョイントセミナー  
環境と発展研究所を訪問  
09.2.21（土）北京水道博物館見学  
北京大学でジョイントセミナー  
09.2.23（月）自然の友を訪問  
JICA 中国オフィス訪問  
09.2.24（火）東京へ戻る

まとめ：自分の研究に役立った点：

#### 1. 民間レベル：NPO の活動内容

- 極端発展主義、中間、極端保護主義という3つの力が明らかになる。
  - 環境意識の向上、環境知識の普及に力を入れる（教科書の発行、新聞における環境意識調査、環境記者の支援、企業 CSR 経営を促進など）
  - 草の根 NGO 能力の向上（ネットワークの構造）
  - 抗議活動（ダムの無断建築を反対するために川ネットワークを構築、民衆やマスメディアに大型プロジェクトに対する思考意識を喚起する役割を果たした）
  - 研究（『中国環境緑皮書』など）
- ※ まとめ：中国における環境 NGO はまだ未熟な段階にあるが、とても活発していると思われる。しかし、中国の NGO は特別な性格を持っている。いわゆる権威主義国家の枠の中での民間組織である。政府と対立する立場に立つ環境 NGO はきわめて少なく、むしろ政府の援助と協力が必要という。今回訪問した“環境と発展研究所”、“自然の友”はいわゆる草の根 NGO であり、政府との関係（税金資源など）を調整しながら、ソフトな姿勢で活動を実施している。そして、中国国内の環境 NGO にはネットワークが整備されてきたが、国際間（特に日本、韓国）の環境 NGO との交流、協力が望まれていると見られる。
- ※ 自分の研究に役立った点：
- 『行動 CSR』：中国の NGO が発行するはじめての CSR に関する雑誌である。中

国における企業 CSR 経営の現状や CSR 理念の探究など、内容豊かな雑誌で、中国現地の企業の環境への取り組みなどの最新情報を入手するために役を立てると思う。

- 『中国水汚染地図』：公共環境研究センターによる作られた『中国水汚染地図』は公表された当時、たくさんの注目を浴びた。これは中国における最初の第三者評価システムを持つデータベースであるため、ある程度の信頼性を持っている。研究におけるデータ収集の参考になると思う。

## 2. 政府レベル：日本対中円借款の内容、日中間環境協力

中国政府の環境政策：

- 循環経済、低炭消費はポイント

Waseda University- Graduate School of Asia-Pacific Studies  
Environment and Sustainable Development  
Report on study trip to Beijing  
Halldor Elis Olafsson  
February 27 2009

The purpose of the trip was to study environmental and sustainability issues in China and see first-hand how various universities and institutes are adding to a growing awareness in China. I believe it is safe to say that the objectives were fulfilled with good participation and exciting presentations.

First on the agenda was a visit to Beijing Normal University. We were greeted by a group of students studying environmental issues under Professor Tao. As with the students of Professor Matsuoka's seminar, their background was very varied and included students from fields ranging from Geography to Philosophy. During the stay at Beijing Normal we listened to presentations from students, had a lively discussion with representatives from Friends of Nature and Building Green Bridges as well as being invited to lunch on their beautiful campus.

After the joint seminar at Beijing Normal we had a meeting with people from the Institute of Environment and Development (IED). IED is a NGO focusing on capacity building through education and research. They explained their operation and the various initiatives they are currently working on with the Chinese government as well as being introduced to IED's New Ventures initiative, which "promotes environmentally

friendly small and medium enterprise development and investment in China”<sup>1</sup>. The first day proved to be very fruitful and gave us a good start for the coming days.

The next day started with a visit to a waterworks museum that displayed the history of Beijing’s first underground water distribution system. After that came the highlight of the day, a visit to Peking University. Again very motivated students focusing on Environmental Economics under Professor Zhang greeted us. Then followed a nice dinner on the university’s beautiful campus with lively discussion.

On the third day students were given the chance to travel by themselves in Beijing and enjoy the city’s sights.

The last full day we had in Beijing turned out to be the most hectic. Firstly we had a meeting with the aforementioned Friends of Nature NGO, an organization focusing “promoting environmental awareness and protection in Beijing and throughout China”<sup>2</sup>. We had a very lively chat with them about their various projects in China, which was unfortunately cut short by our tight schedule.

JICA’s China office was the next stop. There we were given a short introduction to their loan and grant programs as well as an insightful look at their future outlook.

The last stop of the study trip was a short visit to Tsinghua University’s Department of Environmental Science and Engineering. There we were given a presentation from a leading Chinese professor in environmental studies.

My personal opinion is that the study trip was a complete success. We gained valuable experience with talking to the various NGO’s as well as having lively discussions with

---

<sup>1</sup> <http://www.new-ventures.org.cn/english>

likeminded students of environmental studies. After the trip I am sure that the students of Professor Matsuoka's seminar are more motivated and focused on their research having gained valuable insight on the subject.

<sup>2</sup> <http://www.fon.org.cn/>

## **Lessons from “Differences”, Lessons from Beijing**

What is the merit of travelling? Shopping? Seeing other people? Visiting famous places? What is it that we cannot gain from just watching travelling documentary? All of this can be summed up into one concept, to experience, in firsthand, the “Difference” in different places. This trip to Beijing is no exception. However, the experiences of differences gained from this trip also shed some light on the issues of environmental cooperation and sustainable development, and the way to deal with such “Differences” in the future.

Environmental management and sustainable development are truly interdisciplinary. They encompassed both local, from the management of local water, and global issues, such as the problem of Climate Change. They are both originated from different necessity, from the physical necessity (Threats to human health, degradation of resources) to moral necessity (Extinction of rare animal, prohibition of whale hunting). They also requires knowledge from varying area of knowledge, from technical knowledge in technology required for environmental management, economical knowledge required for planning, and social knowledge require for implementing the environment and sustainable development. Moreover, the differences in institution, political and social structure, geographical characteristics, are all contributed to the environmental management and sustainable development.

With such a wide area of different knowledge, characteristics, and motivation, it’s almost impossible for us to avoid conflict that resulted from the issues. Different history, background, agenda, and social background, each different factors are all contributing to the understanding and the reaction that each people have toward the issues of environmental management. Therefore, the people who are going to take part in this field of knowledge must prepare themselves, not only academically, but also mentally, to be able to understand the issues from various points of view. The success of environmental management and sustainable development may lies in some part to the ability of concerning party to understand their own and other group standpoint, and the abilities for every group to reach the best solution within the given situation. We must also note that the success of each party is not only achieving their own agenda or goal, but also the fact that no parties are forced to take unnecessary sacrifice.

This trip has shown, quite clearly, the difference between each group of people. From the difference in viewpoint of the micro, techno centric viewpoints of the students from the Peking University, to the macro, socially oriented viewpoints of the students from Beijing Normal University and Waseda University. The Pragmatic, do what you can, point of views of the Chinese NGOs and the idealistic, do what you should, point of view of the students. Even the comments gained from different professors from different institution also show the different between viewpoints and interests of the parties involved regarding the issues of environmental management and such meetings.

What is the implication of this? First of all, the rather obvious and unavoidable differences between each party are rather prevalent. Secondly, the problem of integrating or compromising different viewpoints for each party may be bigger than we thought. While the joint-seminar might prove to be beneficial to both groups of people (hence less friction and conflict), in the real world of benefits and costs, managing the differences between each group of people might require a lot more effort. Answering to the need of a particular group of people might put a tremendous cost on the other groups. A good amount of efforts and resources are required to manage such differences in different issues.

Differences in viewpoint also have some beneficial effect. They bring the issues into a wider, richer analytical environment. Environmental engineers, while possessing the technical knowledge of the issues, might not be able to understand the impacts of the technology that it will have toward a wider group of people, or might not be able to understand the financial impact that it may have toward the government or the taxpayer. The evidence of this benefit can also be seen from the joint seminar, where both groups of the seminar are able to find some improvement from the different viewpoints that each group has. Examining the environmental policy through different viewpoints simultaneously allows us to implement policy with higher possibility of success.

If dealing with different groups of people with different viewpoints is so hard, how can we increase the chance of understanding between different groups of people then? One of the answers might lie in establishing the common languages between the concerning groups of people. This common language is not a language in the usual term, such as English or Chinese, but it is the common languages in terms of what it represents, Facts. Whenever we talk by using facts as a basis for understanding each other, the difference between each party can be conceived jointly by every group and the difference between concerning groups will be put aside. Avoiding the influences of emotion, history, agenda, and individual motivation upon one's decision can be hard, even impossible. However, by relying on the basis of facts, these external influences will not be able to steer the discussion into a pursuit for the baseless goals.

However, facts without understanding might not prove to be reliable sources of knowledge for decision. In the same way that a mathematical formula has no meaning to the untrained eyes, the facts which lack understanding from the concerning group of people are somewhat lacking in value. Therefore, another important factor is to allow each group concerning the issues to understand the viewpoints of each other. While this may seem all too easy, it is quite hard to achieve in reality. People with different backgrounds can have different perceptions about the same issues. While building a dam in a certain area might create a large amount of electricity for people all over the country and have all the economic and political support, the drawback from the project should not be judged only by the viewpoint of the people who gain the most benefit, but it should also be judged from the viewpoint of those who suffered the most. Not only answering to the aspect of equity, understanding the viewpoints of other groups of people could help in providing a better solution to the problem at hand. Fieldtrips and a visit to the site could provide

such information to the concerning group. However, some time fieldtrip or a visit might not prove to be viable, this is where a sincere exchange of information within the basis of facts will come to be important again.

This may seem all too familiar, but the merit it contained deserved repetition, especially for the field of environment and sustainable development. Since this field contained characteristics from different field of physical, natural and moral knowledge and varied group of people and agenda, the importance of facts and understanding of facts should never be abandoned. Negotiation and planning within the field of environmental management, therefore, is not to push one's agenda upon other people agenda, but letting both sides understand the importance of each other viewpoint and use such opportunities understand the difference, strength and weakness from each group of people and use them to fulfilled our common objectives. While the benefits that each person receive from this trip may varied, this trip has undoubtedly allowed both side of the people and places to gain some experiences and understanding of each other, such experiences will prove to be an important step in further understanding and better cooperation of both sides in the coming futures.

Report  
*China Trip Synopsis*  
Zemi trip  
Submitted in partial fulfilment of the requirements  
for the Master of Arts (International Relations)  
Graduate School of Asia Pacific Studies  
Waseda University  
Professor Matsuoka

Warren Pohl  
SID 4008-R360-4

February 2009

## Trip to China – Synopsis..

The seminar trip to Beijing was quite productive and expanded my narrow preconceptions of China. I had negative ideas about the authoritarian and oppressive communist government controlling too much and putting the environment second to profit. However as I leave the country today my feeling is that there are many people, non government organizations and public sector groups committed to environmental management in the face of rapid development.

China has the infrastructure and know how to make very considered decisions and adopt clear and productive strategies to manage climate change. Whether they will adopt targets for the 2009 Copenhagen summit seems unlikely. When prompted, the professors advised against setting targets at Copenhagen giving the reason that China should be allowed to develop further without target restrictions.

I was also intrigued and impressed with the relationship between NGO's and the government. The role of NGO's in China is to be suggestive and the present reliable and well researched data on the environment so that the government can act upon the problems. This is entirely different to the more aggressive approach of the west. Notable projects were based on education such as building an eco designed school in the earthquake affected zone of Sichuan. Quite impressively the school is to be built to utilize solar power, rainwater recycling, grey water recycling and other green initiatives designed to create awareness for the students that study there. I feel these types of

projects although micro in scale can be extremely effective in the realm of sustainable urban development.

I was also very happy to visit JICA to learn about the various grants, loans and technical assistance allocated to China from 1979 and how this has changed over the years. Most impressively were the low interest loans for civil works eg. The Japanese loaning 50% of the cost to assist in the building of the major infrastructure that is Beijing Capital Airport. I feel JICA delivers a very balanced set of ODA to China. They define it in 5 categories

- co-operation toward resolving environment and other global issues
- assistance for open and reform policy
- promoting mutual understanding
- assistance for poverty alleviation
- others

It is balanced in that these initiatives are targeted specifically for China and are providing promising results.

All in all, it was a very satisfying trip.

## 北京での海外ゼミ報告書

### 目次

- ・ 1. 活動概要
- ・ 2. 日程表
- ・ 3. 交流団体
  - ・ 3.1 北京師範大学
  - ・ 3.2 NGO 環境と開発機構
  - ・ 3.3 北京水道博物館
  - ・ 3.4 北京大学
  - ・ 3.5 NGO 自然の友
  - ・ 3.6 JICA
  - ・ 3.7 清華大学

#### 1. 活動の概要

期間：2009年2月19日～2009年2月24日

目的：今回の海外ゼミは、北京にあるいくつかの大学生との交流や、水道博物館の見学、それに JICA の北京事務所の訪問等によって、中国北京における環境の持続可能な発展について交流を深め、また日中環境協力の発展を目指すために活動を行った。

#### 2. 日程表

日付	予定	宿泊先
2月19日 (木)	日本出国 (松岡) JAL 781 成田 10:50 北京 14:00 (学生) NH0905 成田 10:35 北京 13:40	京倫ホテル (北京)
2月20日 (金)	10:00 北京師範大学で学生による研究発表 14:00 NGO 環境と開発機構を訪問	京倫ホテル (北京)
2月21日	10:00 北京水道博物館	京倫ホテル

(土)	14:00 北京大学で学生による研究発表	(北京)
2月22日 (日)	18:00 北京オリンピック関連 鳥の巣とウォーターキューブを見学	京倫ホテル (北京)
2月23日 (月)	10:30 NGO 自然の友を訪問 14:00 JICA 北京駐在事務所を訪問	京倫ホテル (北京)
2月24日 (火)	日本帰国 (松岡) JAL 780 北京 8:25 (学生) NH0906 北京 14:50	京倫ホテル (北京)

### 3. 交流団体

#### 3.1 北京師範大学

初日の交流のため、メンバー達がわくわくしながら、40分以上早めに北京師範大学に到着した。北京師範大学の学生達がすでに教室の中で待機し、たくさんのお菓子や、バナナ、みかんなど用意してくださった。

いよいよ時間になり、北京師範大学の Xiaorui Cheng さんと早稲田大学の Kanok さんが司会者をつとめ、交流をスタートした。参加者には NGO 団体自然の友 (Friend Of Nature) が同席された。

早稲田大学の Ragga さんによる「General Budget Support and the Paris Declaration」を発表され、Xiaopin Sun さんによる「Assistant material for presentation: A try to resolve ecological crisis」を発表し、ティーブレイクが挟んだ。その後、池田さんによる「Evaluation of China and Japan's Environmental Cooperation」を発表され、学生によるディスカッションがスタートした。20分の討論後に、両校の学生がお互いに交流をしながらランチを取った。

午後には、Christiana さんによる「Introduction of my work experience in ENGO and the research plans in the future」が発表され、その後に Lee さんによる「Governance Structure for Addressing Chinese Environment Problems with a Focus on the Role of NGO」が発表された。

ま。

#### 3.2 NGO 環境と開発機構

環境教育を中心に活動を行っている NGO 団体である。小学校、中学校、高等学校を訪れて環境教育を宣伝し、独自のテキストを用いて、環境責任を取ろうとしている。また、実際に「ソーラーエネルギー」で「車」を駆動できるようになった。それに、風力発電装置の模型を拝見した。

### 3.3 北京水道博物館

中国北京、特に紫禁城に水道を入れる目的は防火のためだったからである。また、当時の使用量のチェックが簡単にできなく、ある程度知識のある人しかできない。そのため、当時のチェック先生はホワイトカラーであった。

### 3.4 北京大学

自分が三番目の発表者として、「日本における温暖化政策を評価する— (OECD) DAC5項目を用いて—」をテーマに発表を行った。問題提起として、中国から日本に留学した時に気付いたのは日本の空気をはじめ、ゴミのリサイクルや、交通手段の普及など大変環境にやさしい政策を取っている。そのため、環境について勉強を進めていきたいと考え、早稲田大学を選んだ。また、環境経済学を専攻し、中国の環境問題に力を入れていきたいと考えた。今回のチャンスを借りて日本の温暖化政策を中国側に紹介したくこのテーマにした。ところが、公害問題を克服した日本が温暖化対策においてまだあいまいな部分が多く、DAC5項目で評価を行うところ、結果は決して高くはなかった。その原因の一つとして、日本の温暖化対策の方針は基本的に自主的なやり方で行ってきたからではないかと考えている。今後の課題として、なぜ自主的な手法だけでは評価が低いかを追究していきたい。

(OECD) DAC5項目はもともと ODA を評価する時に用いた手法であった。目標達成度、効率性、インパクト、持続性と妥当性の5つであり、この5項目を使って温暖化対策を評価すること自体は非常にチャレンジングなことで、適当であるかどうかは検討する価値もあると考えている。

また5項目に評価を付ける際に、5段階に分けて「5点：非常に良い」、「4点：良い」、「3点：普通」、「2点：悪い」、「1点：とても悪い」と評価点数をつけ、総合評価を行った。ここでのポイントは、5段階の評価に何点を付けるかはメジャーメントが必要であり、メジャーメントの勉強は今後の課題として考えている。

### 3.5 NGO 自然の友（先述したので、省略）

### 3.6 JICA

新JICAが成立後、新しい案件のODAローンが停止し、今後中国との協力関係をどのような形で維持し、それに、JICAを最大効果に発揮するためにどうしたらよいかについて交流を行った。

### 3.7 清華大学

環境科学と工程系で Miao Chang 教授と Kunmin Zhang 教授と挨拶をし、Zhang 教授が中国における環境技術開発の現状についてプレゼンをなされた。

Matsuoka Seminar  
Ragnheidur Reynisdottir  
February 27<sup>th</sup>, 2009

#### Professor Matsuoka Seminar's Study Trip to Beijing

The aim of the study trip was to learn about developmental issues in China, and we aspired to reach this goal by visiting universities and local agencies.

On our second day, February 20<sup>th</sup>, we went to the first university, Beijing Normal University. Two students from Waseda, and two students from Beijing Normal gave presentations. I presented my MA thesis on the General Budget Support aid modality, and as it was quite different from what the other students were presenting, I did not get a lot of feedback. However, I found it very interesting to listen to the other presenters and learn what they were interested in.

On the following day, February 21<sup>st</sup>, we went to Peking University. It is the most distinguished university in China, and we were received excellently by both student and faculty members. The presentations of Peking University were of a higher quality than at Peking Normal, and so were the comments from the students. The students at Peking University were very driven in their research, and very well prepared when answering questions from the Waseda group. Both presentations from

Peking University were done at a more micro level than what we are used to at Waseda, and the students work in groups to come to conclusions about their research topics. The two topics covered by the Peking University students were “Evaluation of Global Warming Policy”, which focused on Beijing especially and then an “Economic analysis of Mercury Control for Power Plants in China”.

The group also went to visit an urban water plant, the first of its kind in Beijing, a local NGO called “Institute of Environment and Development”, and another NGO called “Friends of Nature” and also the JICA China Office.

The most interesting of the above mentioned were the two NGOs, “Institute of Environment and Development” and the “Friends of Nature”. Not only did we learn about the various environmental problems that China faces and what those agencies are trying to do to solve them, but the staff also spoke sincerely about the difficulties they face with regards to Chinese authorities. There is an optimal situation, but the reality is that China is ruled by a Communist government, and that is what the NGOs need to face in their work.

The study trip lasted for only five days, but felt as if it was a lot longer, because we were so active. We not only got to go to the above mentioned places, but we also did as much sight-seeing as possible, had dinner with the Peking University students and professor, and got to know our own

semi members better. This was a trip well worth taking, and as a student who is graduating at the end of March, it was very interesting to see how people can actually use the education that I will be getting, and how driven they are in their careers.

## Report for the Seminar Trip to Beijing

2009-02-28

Waseda GSAPS Lee, Hanjoo

First of all, I want to express my gratitude for Professor Matsuoka, who admitted me to this trip, and also for those friends with whom I spent a pleasant time in Beijing. Particularly, I thank Alice, Ikeda-san, and Ms. Xia who worked a lot for organizing meetings and doing administrative chores. Below, I will describe my experience and impressions acquired during this trip. Firstly, I will talk about my experience at the universities and environmental NGOs(ENGOS) that we visited. In addition to those visits, I will add some reflections on my personal conversations with Chinese and American friends.

Beijing Normal University was the first academic institution that we visited. I made a presentation on social capacity in environment of Chinese governments and ENGOS at the university. I tried to spark off a debate on what public good stands for in China during the discussion session. I had thought that China lacks an impartial standard for figuring out public interests or public good because of the arbitrary one-party rule imposed by the Chinese Communist Party. The party is presupposed to know what public good is in theory and it imposes severe restrictions on the freedom of speech and association, which in turn are essential conditions for the social conversation to approach public good. That was why I thought that procedural justice was missing mainland China despite recent political changes in

people's congresses at various levels. However, no meaningful response was heard from the friends at BNU, maybe because I was too direct in the way I presented my views or else.

The second academic institution we visited was Peking University, and again, I could meet many bright young students working on environmental issues there. After finishing the presentation sessions, we moved to a nice dinner on the campus. Over the dinner, I boldly questioned Professor Zhang Shiqiu, who hosted us why Chinese government is so reluctant in adapting to international norms on the environmental issues or human rights protection that it arouses suspicions of Chinese intentions among other countries. I admit that I was quite rude to raise the Tibetan Question, but it was the very illustrative example which shows Chinese government's poor record for observing international norms. After Germany and Japan went amok during the Second World War and England and France was disillusioned of their misguided ambitions, international community has built a human rights regime which places a high priority on protection of human rights. It was because that the international community came to an understanding that promotion of universal human rights was conducive to international peace and general welfare of human existence which in turn mutually enhances each other. I was wondering if mainland Chinese government really had this kind of understanding. This concerned me when I was having a conversation with my Chinese friends including Professor Zhang, Shiqiu. After all it is them who form and control the government, not vice versa.

At Tsinghua University, I audited a presentation session by a renowned professor whose surname was also Zhang. He raised a question on what standard should be

applied when allocating the burden for combating global warming between countries at different development stages. It was very stimulating question and he suggested that the per capita emission of carbon dioxide would serve as a just standard to allocate the burden. We did not have a much discussion time there, but my impression was that Tsinghua students are very bright and looked rightly motivated to do graduate works.

We visited two ENGOs as well as those three universities during this trip. The name of the first ENGO was Dao Institute for Environment and Development. Mr. Chen, a staff who seemed to be at my age (27,) answered some of the questions that I sent him in advance via the e-mail. My impression was that the institute was a fake NGO. I found that a fat middle-aged woman tried to stop Mr. Chen's answering when it comes to government-related issues and provided "right answers" instead. Another middle-aged man at the institute also did not seem to be genuinely committed to environmental causes and was rather busy defending government policies. In other words, they did not seem to be activists but more like bureaucrats. I left the place with suspicions of their true nature. The second ENGO we visited was Friends of Nature, the oldest one in mainland China. They were undertaking many projects and were eager to publicize their progress on them with us. In contrast to Dao Institute for Environment and Development, Friends of Nature seemed to be really concerned of environmental causes. However, one of the staff admitted that they still could not make a protest against a government policy. This point made me question the autonomy of Chinese NGOs and the so-called civil society(公民社會 *gongmin shehui*.) Two of my Chinese friends later told me that NGOs in China are generally not autonomous, which means that they are put under

government control. One of them, a PKU graduate student, even had not heard the name of Friends of Nature ever before, which sounded rather surprising to me. In sum, I came to suspect the character of the so-called Chinese ENGOs after this field-work. Although there are some genuine activists, their government maintains a tightened leash on them, which conditions their development.

I think the most unique experience gained during this trip came from my personal conversations with Chinese friends. One of them told me that what made Chinese people feel distasteful for the Tibetan Question was a certain double-standard prevailing in the international society. I thought what he said might be true, that is I could understand why the Tibetan Question or some other offensives from foreign countries in disguise of environmental protection or else make Chinese people frustrated. Say, some French people make a big fuss over the so-called Tibetan Question, but is there any western country which criticizes barbaric atrocities committed by those civilized French in Vietnam and China? That might be why Chinese people and their government wanted to seek more fairness in international affairs. Nevertheless, I believed Chinese government had showed the same kind of dishonesty for the Tibetan Question; double-standard and anachronism might be the right word describing the behavior of Chinese government when it comes to the issue. I hoped Chinese government elevated the level of its human rights governance in China, especially in Tibet where freedom of religion and culture are seriously challenged by the development policies of Beijing government.

After all, the decision is up to Chinese people and their government whether or not to adhere to principles of international protection of human rights. The world will not be forged in the image that seemingly recklessly nationalistic China holds for it.

In other words, as long as China does not adapt itself to preexisting international norms, rules, principles and *modus operandi* of the international society, it can not exert any meaningful leadership over the world. Rather, it is more likely that China would be left out and can not gain respect from others. It would be certainly in Chinese interest to participate in the norm-building processes to address some of the most pressing environmental issues, and it will be China itself who pay the cost when it failed to conform to international standard for environmental protection or to keep up with changing trends in applied technologies.

So far, I described my experience and impressions from visits to universities and ENGOs as well as parts of my personal conversations with Chinese and American friends. Through this field-trip, I came to be sharply aware of the difference between perspectives held by different people. In the meantime, I saw almost all issues, ranging from environmental ones to economic interdependence to human security, are interconnected with each other at a code of globalization. The real problem seems to be that almost all nation states interpret globalization as a new constraint on the traditional concept of the so-called national interest. However, I think this kind of conventional thinking obsessed by nationalism will misguide them when they try to solve globalized problems and it will even fail their national interests at the end of the day. It seems that the essence of decisions has been rapidly changing but the way they think lags behind the trend. I do not mean that they should think in avant-garde fashions, but they should at least synchronize with the beat of globalization. Unfortunately, I found many striking discords in China and I hope we would be able to get it straight without a big cost in the near term.

I strongly hope Waseda University Graduate School of Asia-Pacific Studies would establish itself as a place for incubating new ideas and perspectives for the region and the world. At least for me, I am sure this field-trip was a good chance to touch the two big elephants; mainland China and globalization, being blinded though

## GP Program to Beijing, China

2009-02-28

Ph.D. program, Matsuoka Project Group  
 Graduate School of Asia Pacific Studies  
 Waseda University  
 Lee, Alice Park

There is a famous saying in China: *'If you want to know 2000 years of Chinese history, go to Xi'An.. If you want to know 500 years of the history, go to Beijing. However, if you want to know recent 100 years of the history, then go to Shanghai.'* This time of visiting Beijing add one extra line to this that *'If you want to prospect the near future of China, you may still go to Beijing'*.

Supported by GP program, 11 students and Professor Matsuoka visited Beijing for 5 days from 19th to 24th of February in 2009. During the visit, they made two times of joint seminars with Chinese universities, visited two Environmental Non-Governmental Organizations (ENGOS), one Japanese governmental office in China, one university, and one Museum about Water Supply for Beijing City.

	Name of Institute	Content of visiting
University	Beijing Normal University	Joint Seminar
	Peking University	
	Tsinghua University	Lecture and Discussion
ENGOS	Institute of Environmental and Development	Seminar and Interview
	Friends of Nature	
Japanese governmental office	Japan International Cooperation Agency (JICA), China Office	Seminar and Interview
Museum	Museum of Water Supply for Beijing City	Look around the exhibition and Q&A session

### Visited Institutions

Joint seminar was a valuable experience that the students and professors who are doing research on environment from different perspectives could share their views. Students of Beijing Normal University were from School of Public Service, where their study is focused on policy making and NGOs studies. Students, professors and commentators from ENGOS could bring the issues of different social sectors, both domestic and international, in environmental sustainable

development among Japan and China. Peking University students were from natural science background, so that participants of the joint seminar could have comprehensive view to environmental policy or convention from both social science and natural science perspectives.

NGOs in China are growing both in quantity and quality. According to the interview at the two visited institutes, environmentalist in NGOs well aware several issues they faced in the process of the growth. In many circumstances, they found a way to live in symbiosis with government sectors, however, when the situation allows they also put effort to influence public, business sector, and government.

The wisdom of Chinese ancestor to figure out the water problem was observed in Museum of Water Supply for Beijing city. Since the water shortage issues now has been spread into local level, national level and finally became a global problem, the world seems need to have greater wisdom than ever. Professor Zhang Kun Min's lecture in Tsinghua University allowed participants to understand tasks that China has to commit for the reduction of carbon dioxide emission from now on.

Visiting JICA office was a good refreshing for this program that participant could see where the official cooperation among the two countries in environment faces to go for the future. By reviewing Official Development Assistant (ODA) Loan, which met the end in 2007, both participants from Waseda University and JICA office could have constructive discussions for the future perspectives of cooperation in environmental sustainability.

Exchange ideas with Chinese students, academics and practitioners could let participants have a glance what environmental challenges that China has been facing, and how those challenges have been brought into the round table within China and international level of discussions. Chinese society has found a strong awareness and motivation to solve the problem that they are facing, while many other multi-disciplinary issues, which make the issue more complicated, raised to the surface. Japan is prospected a decent partner for China for further cooperation in environmental sustainability for Asia and global, such as in technological assistance including human resource development for related sectors.

It was nice to visit Beijing after 6 months of Beijing Olympics were ended, and what has been learned in this visit will be a foundation for advanced research on international cooperation for environmental issues and policy making studies for the participants.

中国における持続可能な発展と日本の環境協力  
平成20年度大学教育改革支援プログラム  
「東アジア高度人材養成共同化プログラム」採択プロジェクト

---

2009年3月31日 発行

代表者 川村 亨夫

発行者 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科大学院G Pプログラム事務局

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 1-21-1

印刷所 株式会社 早稲田総研インターナショナル

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1

---